〈研究ノート〉

村井吉敬氏収蔵スライド資料の整理状況とその意義

土屋　昌子（恵泉女学園花と平和のミュージアム）

はじめに

上智大学教授で東南アジア研究者であった故村井吉敬氏（1943～2013）が研究生活の中で蓄積された資料は、2015年より恵泉女学園花と平和のミュージアムで保管されている。移管当初から資料別に順次、調査・整理を進めているが、本報告では、そのなかのスライド資料について整理状況を研究ノートとして紹介したい。

１．村井吉敬氏の生涯と業績

村井氏は早稲田大学大学院経済学研究科を卒業後、インドネシア共和国国立パジャジャラン大学に文科省派遣留学生として留学。帰国後、上智大学国際関係研究所（1978～）を経て、上智大学外国語学部で長く教鞭をとり（～2007）、2008年より早稲田大学大学院アジア研究機構に移って研究活動を続けられた。東南アジア各地をくまなく歩き、とくに多島海の海域に生きる人々の暮らしを見つめながら、社会経済のあり方を問い続けた稀有な学者であり、市民運動家としても知られている。

留学中知人に宛てた手紙をもとに書かれた『スンダ生活誌』（NHKブックス、1978　新装版『インドネシア・スンダ世界に暮らす』岩波現代文庫、2014）を皮切りに多くの著書を精力的に発表した。『小さな民からの発想―顔のない豊かさを問う』（時事通信社、1982）、『スラウェシの海辺から』（同文館、1988）、『エビと日本人』（岩波新書、1988）など自らの見聞を土台としたすぐれたレポートを記憶している人も多いだろう。80年代、90年代を通じて日本の政府開発援助（ODA）のあり方を鋭く問い、私たちの暮らしに身近な問題として日本社会に多くの提言を行った。

また、『バナナと日本人』（岩波新書、1982）などで知られる故鶴見良行氏（後述）らと共に、村井氏の活動が地域研究（東南アジア研究）や消費者運動に与えた影響は大きく、その結果、日本でもフェア・トレード（民衆交易）や国際協力NGOが生まれた。村井氏は日本平和学会、アジア政経学会、アジア人権基金などで理事、理事長を務めたほか、京都大学東南アジア研究センター学外協力者、アジア太平洋資料センター（PARC）の共同代表など、広範な社会活動を通して平和運動を実践しておられたが、2013年すい臓がんのため惜しまれながら、69歳でその生涯の幕を降ろされた。

村井氏は恵泉女学園大学（1988年創設）の初代学長で、元早稲田大学総長であった村井資長氏の二男でもあり、母の村井貞子氏は恵泉女学園普通部1回生であった。わずか9名の生徒と寺子屋のような学舎で始まった女学校（恵泉女学園普通部は1929年創立）で、創立者河井道の深い愛情を受けて学んだ世代である。学園史料室には村井吉敬氏が幼いころに描いた絵が、河井道の自筆の書き込みのある愛用カレンダーに遺されている。筆者は現在、花と平和のミュージアムの実務委員として資料整理を担当しているが、前任部署は学園史料室で、学園の歴史に関わる史料整理にあたっていた。

２．移管の経緯

花と平和のミュージアムは、2014年11月に恵泉女学園大学多摩キャンパス内に、大きな展示施設をもたない、エコミュージアムとして開

設された。学園にゆかりのある人々が遺した研究資料をはじめ、教育理念である園芸、平和分野での教育研究活動の中で蓄積されたモノ、コト、人々の足跡を広く「恵泉の宝物」として収集し、次世代の教育・研究活動、社会貢献活動に活用していくことを目的としている。村井氏の記録は本学教授であった故新妻昭夫氏（博物学、自然史関係資料）、同荒井英子氏（ハンセン氏病関係資料など）の資料と共にミュージアム開設時の基本資料として受け入れられた。

村井氏の資料については2015年5月20日にお連れ合いであった内海愛子氏（恵泉女学園大学名誉教授）から寄贈を受けている。村井氏の資料は、当初①早稲田大学研究室、②自宅書斎、③自宅書庫の三か所に置かれていた。このうちスライド資料は村井氏が上智大学から早稲田大学に移籍した際に研究室に設置した専用キャビネット（A・B）に保管され、村井氏自身が整理した状態で遺されていた。キャビネットは空調設備の関係で資料の劣化防止のため、いったん世田谷区にある恵泉女学園史料室の保管庫におかれたが、2017年に恵泉女学園大学多摩キャンパスのミュージアムに移設された。

（写真1）キャビネットA（左）・B（右）バインダーに収められていないシートをすべて箱に収納したところ　於：恵泉女学園大学南野キャンパス（2019）

3．スライド資料の成立

3.1　村井氏と写真撮影

村井氏は1960年代から写真撮影を始めた。山行などに携行したカメラはツァイス・イコンタやニコンだった。自宅に暗室を作りフィルム現像も印画紙現像も自分で行っていた。1975～ 77年のインドネシア留学中から本格的に調査対象の東南アジア地域の写真撮影を始め、スライドにして蓄積している。80年代中ごろまではネガ・カラーとポジの白黒のフィルムを併用し自分で焼き付けも行っていた。当時シャッターはあまり切らず、一つ一つの風景がしっかりと自分の網膜に焼き付いた感じがあったという。（講演原稿：『僕が歩いた東南アジア』―少しだけ裏舞台―、2009）

2000年代初めからデジタルカメラによる撮影が始まり、そのデータも別途残されているが、本報告は村井氏によって整理作業が進んでいたフィルム写真を基にしたスライド資料を対象とする。

村井氏は先述したように1975年にバンドンに留学後、長年にわたり研究者として、インドネシアの伝統社会がどのように変容していくのか、観察、記録してきた。その記録は新聞、雑誌に発表され、書籍にもなった。大学での講義や講演活動での資料、パワーポイント、さらに氏が関わった市民団体などから映像フィルムなども制作されている。その土台となったのが、フィールドノートであり本ミュージアムで保管されている写真記録であった。

村井氏が「記録魔」だったことについては、70年代から鶴見良行氏と交遊が深かったことと無縁ではないだろう。村井氏が鶴見氏と対話や旅を共にする中から、自らの学問への姿勢を問い、日本社会への問いかけを続けてきたことはよく知られている。村井氏曰く「（鶴見氏のバナナ研究は）『歩く、聞く、記すが基本、そして文献で補う』である」。（PARC自由学校「鶴見良行のアジア学を読む　わたしにとっての鶴見良行―『バナナと日本人』を一応の基本として考える―」1999、村井）。村井氏は鶴見氏の「自前で歩く旅」に同行するなかで、「西洋の学問を振りかざしてえらそうなことを言わない」「言いたいことをはっきり言う、書きたいことをはっきり書く」という鶴見氏のスタイルを見定め、「歩く学問」と呼ばれる研究スタイルを継承した。見たものを撮影することは重要な記録作業であった。

3.2　村井氏のスライド資料について

1975年から2000年までの写真は、カメラがデジタル化する前のフィルム写真である。

この期間のフィルム写真は村井氏が研究対象として撮影した記録である。スライドの総数は約4万5000点あり、ネガフィルムからプリントした紙焼きの数は含まれない。これらはテーマ別に分類することも可能で、分類したスライドを見るとインドネシア社会がどのように変動してきたか、都市、農村、漁村の各地域でのそれぞれ多様な社会の変動と、人々の暮らしの変化が見えてくる。例えば町での交通は、馬車、ベチャ（三輪の人力車）、小型乗り合いバスが入り混じっていた。のちに高速道路が建設され交通網ができると、町に車があふれ道路は渋滞するようになる。農村ではかつては稲刈りにアニアニ（手の内に隠れる収穫用の小刃）が使われていた。スライドを村井氏の著作と併せて見ていくと、例えばそこで働く人々は、農民なのか漁民なのかスライドを通して様々な疑問や感想が浮かんでくる。また日本で売られるエビがインドネシアからどのように流通してきたかも具体的に見えてくるのである（『エビと日本人』、『スラウェシの海辺から』など。分類については後述）。

4．調査

スライド資料の整理には、内容の精査が前提となる。まず写真・画像についておおよその現存資料全体を把握した上で、デジタル化の可能性と史料的価値について担当者による調査、検討を行った（前章３.スライド資料の成立の項、参照）。その結果、スライド資料については残存状況と人的リソース、スライド資料の内容を補う残存文書資料の調査から、データ化の作業は業者委託せずに自前で行うこととした。

すなわち、数万点単位のスライドを一括して業者委託する場合、費用もかかるが、何より個々のスライドの内容の関連性を保持できない。関連性を保持するためにはメタデータの付与が不可欠である。これは内容の精査を前提とした作業で、手間ひまがかかるが、本資料程度の数量（約45,000点）で後述する人々の協力（人的リソース）があれば、別途残されている村井氏の記録史料を活用することにより、数年以内のスケジュールで実行可能と判断された。

4.1　残存状況と数量・内容の把握

専用キャビネットの現存状態は次の通りであった。スライドが収められたシートはおおよそ4つのかたまりに分かれており、一つ目はキャビネットAの上段に村井氏手書きの背表紙のついたバインダーに収められているスライドで、比較的情報（撮影年代、撮影地、テーマ）が多いものである。二つ目はキャビネットAの下段の5段の引き出しにマウントの収められたシートが仕切りで区切った区画に収められていたものである。三つ目は、キャビネットBの上段にまとめられた黄色い箱に入ったバインダー52冊で、デジタル化が済んでいるものである（後述）。四つ目がキャビネットBの下段の棚にスライドシートを束にして重ねた状態で保管されていたものである（写真１参照）。

キャビネットA
- （上部）テーマ別バインダー　約8,000点
- （下部）引き出し式キャビネット５段に整理されたシート　約15,000点

キャビネットB
- （上部）通し番号（１～52）のついた黄色いバインダー　約15,000点
- （下部）キャビネットの棚にシートが重ねられた状態で保管　約7,500点

このうち、黄色い箱に入ったバインダー（黄色バインダー）については、村井氏の生前からデータ化が進められ、約15,000点の画像データがすでに存在した。このうち約６割にメタデータ（撮影年月日、撮影地、ほか）が付与されている。これはおおよそ、刊行が予定されていたフォトエッセイ（仮）（2009年に『僕が歩いた東南アジア』として刊行）に掲載する画像として選別されたものと考えられる。シート上のスライドは、ほぼ仮目次の章順に並べられていたが、撮影年月日や撮影地が特定できないスライドが含まれていた。

また、この画像データは鶴見文庫（鶴見良行氏の旧蔵資料）を所蔵する立教大学と共有されている。このため、2019年4月に所蔵機関である立教大学共生社会研究センターを訪問し、メタデータの付与にかかわる作業面でのアドバイス

等を受けた。

4.2　現存状態の保存とモノ資料としての保管

黄色バインダーのスライドのデータ化は上述のように恵泉女学園に移管される以前、村井氏の死去後も進められていたが、撮影年月日、撮影地などの情報が限られており、作業は中断された状態になっていた。

スキャニングの前段階で、すでにデータ化されている画像とモノとして残されているスライドをどのように統合するかが課題となった。まずシートごとのスライド約３万点の整理について検討した。最終的に、黄色バインダーのシートを含むすべてのシートの保存状態を次節「5.1 データ化の準備」に述べる方法で保存し、何らかの理由でここに戻る場合の手がかりを残すこととした。これによりもともと村井氏の手元にあった2013年3月の状態が保存される。

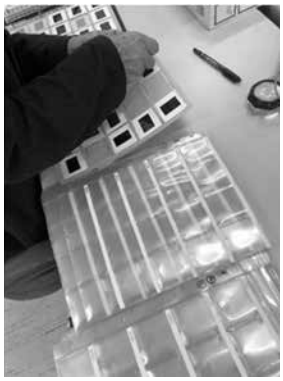
その後、村井氏の行動記録（文書資料の中に既存）を精査し、スライドとシートに残されている記録やあらたな調査結果を付与して撮影年月日（および撮影地）を特定することにより、黄色バインダーの15,000点も含め、スライドおよびシートの全量を時系列に並べ替えることとした。

現物調査では、テーマ別のバインダーに収められたスライドの保管にビニールケースが使われており一部酢酸臭が認められた。スライドは酸化により経年劣化を引き起こす。酢酸臭を発したり、変色や変形などの症状が出てくるものであるが、これを抑えるために次のような基本作業を行った。

①状態の悪いシートは新しいシートに交換しスライドを入れ換える。

②劣化したマウント（スライド用のリバーサルフィルム〈ポジフィルム〉をスライドに加工するフィルムの枠にあたる部分。マウントで枠づけされたものをスライドという。写真５参照）は、新しいマウントに付け替える。

③ビニールケースに収められているスライドは、ビニールケースから取り出し、新しいシートに入れ替える。



（写真2）ビニールケースに入ったスライドをシートに入れ替える

4.3　作業担当・協力者

スライド整理の始まる2019年４月をさかのぼること約１年半前の2017年6月、かつて鶴見良行氏が撮影した膨大な写真データの記録保存作業に関わった中島保男氏（1976～2015年までインドネシア在住）が、村井氏の友人である久保康之氏と共にミュージアムの村井氏関連資料を見学に来られ、スライドの保管状況を視察された。この後、中島氏が生前の鶴見氏や村井氏と親交がありインドネシアでの調査旅行に同行されていたことや、長年インドネシアで製版工場を経営されており、インドネシア語や現地の地名にも明るく、写真や製版の知識を持っておられることなどから、スライドの整理に関わっていただくことを依頼した。約1年をかけて中島氏を説得するとともに、氏の環境の変化もあり、積極的に関わっていただくことが可能となった。2018年夏以降、データ化に関する打ち合わせを行い、技術的な支援がうけられることとなった。

これに合わせて、以前より内海愛子氏の映像関連資料の整理にあたっていた伊藤孝喜氏に2016年から村井関連の文献、資料の整理に関わっていただけることになり、特に文書資料の中から、旅行記、旅程表、メモ帳、ノートなどの調査を進め、村井氏の行動記録を新たに作成することとした。マックユーザーの伊藤氏は映像、画像の処理に明るく、中島氏と共にスライド資料のデータ化の実務を担当している。これらのことがデータ化の準備として進められた。

５．整理状況

5.1　データ化の準備

5.1.1スライドの保管記録の作成

手順

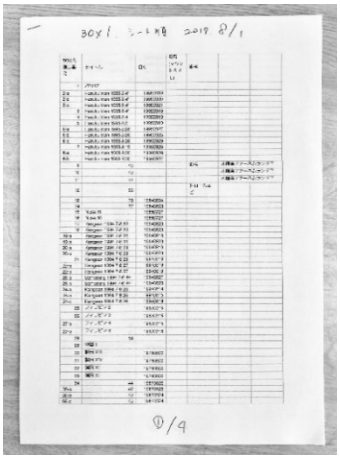
①シートを年代別に整理；シートに年代順のIDを付与する。

②マウントにIDを付与する（年代別に整理する作業と並行して行う）

③シートを接写し、画像およびエクセルデータとして保存

④IDを付与したスライドを年代別のシートに入れ替えて、撮影年代順に整理する。

⑤撮影日付順にシート、スライドを並べ替える。



（写真3）シートを接写し画像およびエクセルデータとして保存（左）
エクセルデータには通し番号、撮影年月日、撮影場所、シート、マウント上の情報を記載（右）

（写真4）シート見出しの例

（写真5）マウント上の情報の例

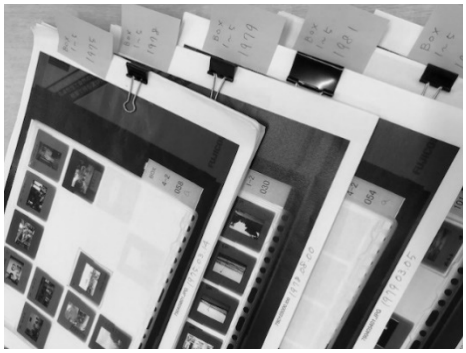
（写真6）日付順にスライドを並べ替える

（写真7）年代順にシートを並べ替える

5.1.2 スライドの保管

シートは年代別の箱に保管し、簡易的に湿温度の管理を行っている。シートは年代順にプリントアウトし、そのファイルから画像を確認できる。これによりシートボックス（箱）を頻繁に開閉しないで済み、スライドの保管環境を維持しやすい。

（写真8）年代別に箱に並べられた状態



（写真9）並べ替えの終わったシートのプリント画像

5.2　スキャニング

スキャニング作業の開始にあたり、データのサイズの検討、スキャナーの機種の選定、画像の保管（メタデータの付与）について専門家のアドバイスを受けて準備作業を行った。

〈スキャニングの手順〉

① 各スライドにIDを付与する（スライドシートのマウントに鉛筆でIDを書き込む）。

② スライドをID順にスライドの膜面、ベース面に注意しながらホルダーに差し込み、ブロアーでホコリを取り除いてからスキャナーに挿入（ブロアーは空気でホコリを吹き飛ばす専用の用具；写真10参照）。

③ スキャナーを設定しスキャニングを行う。

スキャナー：EPSON Photo PC-Factory F-3200

設定：スキャンデータはjpg．で8～10MB、tiffで35～40MB

jpg圧縮はMaxレベル10

④ スキャン画像の修正

・スキャンデータはマウント部分までスキャンするためデータ上に黒い枠が現れる。そのため、その黒い枠の部分をカットする作業を行う。

・スライド内にホコリ、キズがある場合、修正して保管する。

⑤ スキャンデータにIDを付与してハードディスクドライブ（HDD）に保管する。スライドを保管場所に戻す。

⑥ スキャニング後、スキャン画像にIDを付けてプリントする。このインデックスプリントを年代別のファイルに納める。このファイルから簡易的な画像検索とスライドの所在場所を確定できる。

6．まとめと今後の課題

村井氏が鶴見氏や内海氏らと共に、1980年代に木造機帆船でインドネシアの海域を巡った旅の記録『ヌサンタラ航海記』（リブロポート、1994年）

（写真10）スキャナーとブロワー　Macと接続したところ

（写真11）インデックスプリントのファイル

も世に知られた著作であるが、その旅でも多くの記録が残された。それらを含む村井氏が遺した記録の総体が、花と平和のミュージアムが扱う「村井吉敬個人アーカイブズ（仮称）」である。本報告のスライド資料はその主要部分である。

見てきたように、フィルム写真をもとにした記録群（＝スライド資料）については立教大学が保管するデータとの整合性を確認し、時系列による並べ替えの作業を経て、データベース化のためのスキャニングを開始した。約1年間の作業を経て、80年代に撮影されたスライドのデジタル化が終了し、時間単位のスキャニング量から現在の作業ペースで進めば、今後約半年で90年代のスライドも完了する見込みである。その後は２年以内の公開を目指している。

公開に向けたデータベースの設計を行う際には、利用者の使いやすさを重視することを検討している。研究者のみならず、例えば高校生や、教育関係者、インドネシア、アチェ、パプアなど村井氏と関連の深い海外在住の人々も含む利用者に、手軽な閲覧の便を供したい。その基本となる「村井吉敬個人アーカイブズ」は海外との関係を視野に国際標準に則った整理を検討している。この文書・画像・映像、音声を含むデジタル記録群をどのように編成・記述し、公開していくか課題は大きい。

テーマの分類については記録作成者である村井氏自身によって何度か作成されているが、一例を示しておこう。

1．国家・国家機関
2．軍、紛争
3．ODA
4．NGO、民衆運動
5．農村・農業
6．船と海と漁業一般
7．南海特殊産品（ナマコ、フカヒレ、真珠、トビタマ、燕の巣など）、海の民
8．エビ（海のエビ、養殖、加工など）
9．都市景観（ショッピングモール、ファッション、道路など）
10. 大学、研究機関
11. いちば、物売り
12. 食べ物（調理したもの、素材）
13. 乗り物（陸上）
14. 工業、家内工業・農村工業
15. 熱帯雨林・マングローブ林・プランテーション
16. 日本軍、日本企業
17. 動植物
18. ツーリズム、遺跡（寺院など）・芸能
19. 記念写真、人物
20. 分類不能、その他

スライド1点から記録作成者の研究テーマ、活動を想像することは困難であるが、スライドをデジタル化し、テーマ別に検索できるようにすると、一つ一つのつながりが見えてくる。それによってさまざまな文脈に沿ったスライドの有効活用が可能になるのである。

スライド以外の資料整理についても付言しておこう。インドネシア語、オランダ語、英語を中心とする外国語文献のリスト化およびタイトルの翻訳作業が終了しリスト化されている（2014年度および2016年度「恵泉女学園大学助成研究報告書」研究代表者、堀芳枝）。貴重なモノ資料（アニアニ、漁労用具、バティック、白蝶貝、船の模型などを含む）は72点の写真撮影を終えた。取材時のメモ帳、手書きノート類は66点がリスト化されている。現在はスライド資料のデータ化のかたわら、地図の整理が進められている。

参考文献

甲斐田真知子、佐竹眞明、長津一史、幡谷則子共編著『小さな民のグローバル学　共生の思想と実践を求めて』上智大学出版、2014
後藤乾一「解説」『インドネシア・スンダ世界に暮らす』（村井吉敬著）2014、岩波現代文庫
鶴見良行『バナナ』鶴見良行著作集６、みすず書房、1998
鶴見良行『フィールドノートⅠ』鶴見良行著作集11、みすず書房、2001
鶴見良行『フィールドノートⅡ』鶴見良行著作集12、みすず書房、2004
橋本陽『概念としてのフォンドの考察―ISAD（G）成立史を踏まえて―』京都大学大学文書館研究紀要第17号、2019

村井吉敬さんと仲間たちの会編『アジアを歩く―村井吉敬さんと仲間たち』2013（非売品）
村井吉敬、内海愛子、飯笹佐代子編『海境を越える人びと―真珠とナマコとアラフラ海』2016、コモンズ
古澤孝洋「『デジタル化』に必要な２つの備え」日本総研、2020/8/05　https:// www. Jri .co.jp /page. jsp?id=36308　最終アクセス2020/9/20
堀芳枝「村井吉敬氏関係資料目録作成」『2014年度恵泉女学園大学助成研究報告書』恵泉女学園大学（未公開）、2015
堀芳枝「村井吉敬関係資料外国語文献タイトルの邦訳およびスライド資料データ化の準備」『2016年度恵泉女学園大学助成研究報告書』恵泉女学園大学（未公開）、2017
LANGTON MARCIA, *TREPANG―CINA & THE STORY OF MACASSAN-ABORIGINAL TRADE,* Center for Cultural Materials Conservation, The University of Melbourne, 2011

参考資料（新聞記事）

書評「記録を超えた実情研究」村井吉敬著『スンダ生活誌　変動のインドネシア社会』朝日新聞東京版、1978年2月27日、閲覧2020/8/25、聞蔵Ⅱヴィジュアル
書評「国際化の原点を指摘」村井吉敬著『スラウェシの海辺から』朝日新聞東京版、1987年10月12日、閲覧2020/8/25、聞蔵Ⅱヴィジュアル
コラム　わたしの言い分「アジア民衆の生活壊す　基本法造り情報公開も―政府開発援助に異議」朝日新聞東京版、1987年5月24日、閲覧2020/8/25、聞蔵Ⅱヴィジュアル
インタビュー「『氷山の一角が表に出た感じ』丸紅文書背景に加熱の受注競争　経済協力大型事業　貿易少なく“宝の山”」朝日新聞東京版、1989年7月3日、閲覧2020/8/25、聞蔵Ⅱヴィジュアル
インタビュー「長すぎた弾圧に幕『大きな前進』『民主化を』故国の変化に熱い思い」朝日新聞東京版、1998年5月21日、閲覧2020/8/25、聞蔵Ⅱヴィジュアル
シンポジウム「地球規模での『連帯』カギ　国境を超える市民―21世紀へのNGO」朝日新聞東京版、1996年5月21日、閲覧2020/8/25、聞蔵Ⅱヴィジュアル